

今回は明治39年の『須永元日記』について触れたいと思います。

【金玉均の13回忌】

1月10日にこうあります。

「訪金英鎮。会李圭完・金俊龍先在。英鎮曰、為亡父十三回忌辰三月二十八日、
雖然、有故、余欲以亡父誕生日一月廿三日營法会」「載之各新聞紙、併報編輯亡
父遺稿及言行録。且乞投寄言行録及遺稿於諸名士」「英鎮曰、希書其事、投之通
信社。余諾之」

金玉均の養子である金英鎮が亡父の十三回忌の法要を命日の3月28日ではな
く、誕生日の1月23日にやりたいというのです。そのことを新聞各紙に掲載す
ることや金玉均の遺稿や言行録を編輯する計画などを明らかにし、通信社への
情報提供を須永に依頼しました。

当日23日の日記にこうあります。

「赴金玉均法会於青山共同葬祭場。金英鎮所營也。犬養毅・榎本武揚・朝吹英次
(ママ、二)等及韓国亡命人等先在。読経畢而詣墓」「英鎮托余以亡父之遺稿及
言行録編輯之事」

金玉均の墓のある青山霊園の一角に青山葬儀所があり、ここで十三回忌の法要
が営まれ、犬養毅や榎本武揚らが参列しました。

金英鎮は金玉均の遺稿と言行録の編輯などを須永に依頼し、原稿は各界の名士

から募ることとしました。

【韓国中立化の夢】

5月5日には朴泳孝と半年ぶりに会いました。

「訪朴泳孝於弓町柳赫魯家。別来殆半歳互話旧誼。朴只嘆故国之日非。且統監府之所為皆入細微、以不適韓国民情、日韓両国皆為之不利而韓国人民悉陷困厄。只所利者日韓之汚吏与日人無頼之徒耳」。

朴泳孝は、統監府による韓国支配が着々と進む中、民情に合わない施策もあって人民が困難な状況に陥っていることを嘆いているのです。

一方、日本は満洲での軍の行動が欧米列強の物議を招き、英米から抗議を寄せられる事態が起きていました。これを受けて5月22日に西園寺公望首相が官邸で「満洲問題に関する協議会」を開催し、元老や政軍の首脳が出席しました。『日本外交年表並主要文書：1840—1945 上巻』によると、席上、伊藤博文統監は次のように発言しました。

「日本ノ満洲ニ於ケル行動ニ対シ、列国ノ物議ヲ招キ海外ノ諸新聞ヨリ非難攻撃ヲ蒙レハ、目下韓国上下ノ人心ハ未タ全ク日本ニ服セス。動モスレハ陰ニ款ヲ露国ニ通シテ日本ノ政略ニ反対セントスルモノナキニアラサレハ、如斯非難ハ忽チ韓人ヲシテ種々ナル空想ヲ抱カシムル…」(原文に適宜句読点をつけた)

朴泳孝はこうした動向を見逃さず、いつの日か韓国の中立化が実現すると思っ

たのです。5月19日の日記を紹介します。

「訪朴泳孝。々々曰、有英米迫撤兵韓国於日本政府之説、而日本之対韓政策、買
欧人之悪感」「而他年見日本之蹉跌、韓国或為東亜之中立乎。余在世之日、得觀
之否」

しかし、今ではよく知られているようにアメリカは前年、日本との秘密の覚書で
日本の韓国における指導的地位を承認していました。この日記の4年後、日本は
韓国を併合しました。

【兪吉濬】

明治39年の日記を続けます。須永は6月2日には兪吉濬と会いました。

「訪朴泳孝。兪吉濬・趙重応先在。吉濬流配八丈島殆五年、今春三月帰東京。在
島之日、朝夕二回、試海水浴。其行程二里、宿痾愈、入夜、即集兒童十数人、教
授文字、而後相俱遊戯。亦人生之一快事也。二人先去、泳孝以明日帰神戸、告別
而去。」

兪吉濬は開化派の政治家で明治14年に来日し、慶應義塾に入学しましたが、

『福澤諭吉事典』（慶應義塾、2010年）によると、これは朝鮮初の日本留学
生であり、近代日本初の海外留学生受け入れでした。在塾中は福沢諭吉邸に寄宿
して福沢に朝鮮事情を伝えるなどしました。16年には渡米し、朝鮮初の米国留
学生として生物学者のE・S・モースに師事しましたが、帰国後、甲申政変の関

係者として一時軟禁され、西洋事情を紹介した『西遊見聞』を著しました。その後甲午改革の中心となってさまざまな改革に取り掛かりましたが、29年に政変で日本に亡命しました。35年、高宗廃位計画に巻き込まれ、韓国政府との関係を考慮した日本政府によって小笠原諸島の母島に「送致」され、翌年、八丈島に移されました。この日記の記述のように39年に自由の身となり、東京で朴泳孝らと会っていたのでした。

[参考文献：李光麟『開化期研究』＝一潮閣、1994年]

【柳赫魯】

5月5日の日記に名前が挙がった柳赫魯は甲申政変で日本に亡命したうちの一人で、これまでも須永の日記にたびたび登場してきました。

8月18日にはこうあります。

「訪柳赫魯。与其男俱相携至清新軒。置酒、話別。以赫魯今宵六時半汽車、歸故山也。赫魯明治二十八年十月再亡命、来日本、居殆十一年。故山之形勢一變。曩雖謀邦家之獨立、君民暗愚、不能自保翻口受我国之保護、而我国之勢、如旭日昇天、韓國之形勢、如落暉。余為赫魯等不能無一掬之淚。以詩成餞。六時半送新橋停車場」

清新軒は銀座にあった有名な西洋料理店です。柳赫魯は明治27年に帰国後、翌28年に再び日本に亡命していましたが、情勢の変化で帰国できることになり

ました。しかし、須永は日の出の勢いの日本から落日の韓国に帰る柳赫魯のことを
を思うと、「一掬の涙」を抑えることが出来なかったのです。明治38年11
月19日の日記で朴泳孝の心情に思いを馳せたのと同じ表現が使われています。

2024年8月27日、9月20日修正 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko>